
リリカルなのは 0 0 StrikerS

過ちは繰り返させない！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのは〇〇Strikers

【NZコード】

N6645Y

【作者名】

過ちは繰り返させない！

【あらすじ】

爆発で起こった次元断層に刹那とフェルトは吸い込まれる。果たして刹那とフェルトの運命は！？ガンダム〇〇なのはStrikersのクロスです。

プロローグ

刹那とリボンズ、二人のイノベイターの戦いが終わろうとしていた刹那の愛機のリペア機『ガンダムエクシアリペア?』は一時的にブーストモードを可能としている

それに武装はGNソード改、GNビームサーベルがある
そして0ガンダムは、特に変わった武装はなかつた

2機は、構えた

0ガンダムは、盾を捨てて、背中からGN粒子を最大に放出し、両手でビームサーベルを構える

エクシアは右手の実体剣を0ガンダムに向けて、背中からGN粒子が何重にもなつて吹き荒れる

そして2機は、最大のスピードで走った

そしてエクシアのコックピット付近にビームサーベルが突き刺さり、0ガンダムにはGNドライブごと貫いた実体剣が刺さっていた
2機は沈黙したあと、爆発を起こしたが、それがきっかけで、次元に穴があいてしまった

刹那は、気絶した状態で、エクシアと共に穴に吸い込まれていった

フェルトたちはヴェーダから貰つた情報で刹那の位置を特定したが、

「エクシアの反応、あつません」

そのポイントにエクシアはいなかつた
フェルトの目元には涙が浮かんでいた

「まだあきらめないで！フェルト、小型艇でエクシアの捜索を！」

「了解…！」

そしてフェルトはブリッジを出ていった

小型艇に乗り込み、フェルトはヴェーダがくれた情報にあったポイントに向かつっていた

フェルトの中には期待と不安が入り混じっていた

（刹那、無事だよね？）

そんなことを思いながらフェルトはポイントに向かう
そしてそのポイントに着くと、おかしなものを見つける
それは、断層のようなものだった

「何あれ？」

フェルトは小型艇を近くまで向かわせる
すると、

「えっ！？」

小型艇が操縦不能になり、断層に向かっていく
そしてフェルトは断層に吸い込まれていった

episode 1

「うへ、じこは？」

刹那は目を覚ますと、そこは地上のどこかの森の中だった
辺りを見渡すもエクシアもない
それに服もソレスタルビーイングの制服になっていた

「一体何が起きたんだ？」

刹那は立ち上がるうとした瞬間、手に違和感があった
それは、刹那の手を誰かが握っていたのだ
刹那はその者の名を口にした

「フェルト…」

刹那の右横でフェルトが眠っていたのだ
フェルトもソレスタルビーイングの制服を着ていた
そしてフェルトが目を覚ます

「あれ？…刹那？」

そしてフェルトの目元に涙が浮かび上がる

「刹那！」

フェルトが刹那に抱きついてきた

刹那は一瞬戸惑った

だが、すぐに落ち着いてフェルトの頭を撫でる

「心配をかけたな…」

「ううん。 刹那が無事でよかったです」

フェルトは笑顔を見せる

刹那は口元を一瞬緩め、すぐにいつもの表情になる

「しかし、ここは一体？」

「私はエクシアを探していたときに、空間に穴があいていたからそれを調べようと思ったら、その穴に吸い込まれて…」

「…そ…うか…」

刹那は表情を暗ぐする

「でも刹那が無事でよかったです」

フェルトは純粋に嬉しそうだった

「マスター」

刹那とフェルトは驚いた表情を浮かべた

そして刹那は声がしたポケットの中に手を入れる
ポケットの中には青い宝石が入っていた

「お前は？」

「私です。エクシアです」

「つーエクシア！？」

刹那とフェルトはなぜエクシアがこの姿になってしまっているのか不思議に思ったが、今は現状を確認する方が先だと思った

「エクシア、俺たちはどうなったんだ？」

「マスターたちは、私とのガンダムの爆発で起きてしまった次元断層に飲み込まれ、こちらに来てしまったようです」

「次元断層ってあの空間に穴が空いてた……」

「フェルトの言うとおりです。あの時マスターは氣絶していたので気づきませんでしたが、フェルトはそれを見ていたのです。そして」「この世界はマスターたちがいた世界ではありません」

「……どうことだ？」

「次元断層で異世界に来てしまったようです。私も気がついたらこの姿に……」

「やうが

「やしてこの世界はアーデナルダといつ魔法の世界です」

「魔法？」

「一人が知っているような絵本に載っているような魔法ではなく、体の中にあるリンクアーコアというものがある」とと、デバイスとい

う機械を駆使して魔法を使つようです。お一人のなかにもリンクアコアはあります

「私にも？」

「はい。フェルトはそれほどではありませんが、マスターの魔力値はSS+です」

「…」

刹那とフェルトは驚いたが、それはエクシアの言葉によりすぐに水に流される

「マスター！」ついに接近していく正体不明の機体を30機確認！…

「えつ！？」「

フェルトは少し怖がつていた
仕方がない

フェルトは普段、トレーニーでオペレーターをする
直接戦闘には出ないのだ

「心配するなフェル

フェルトは刹那を見る

「フェルトは俺が守つてやる…」

「…」

刹那は言う

仲間を死なせはしない！

そして突如一人にエクシアが言つていた機影が到着しようがあり、二人に攻撃をしてきた

「ちつ！」

「えつ！？キヤツ！」

刹那はフェルトを抱きかかえて走る

フェルトは少し顔を赤くする

刹那はフェルトをお姫様抱っこしている
女性だつたら赤面してもおかしくはない

「マスター戦いましょうー私の名前を言つたあとセットアップと言つてください！」

「了解！エクシア、セットアップ！」

そして刹那の体が光り始めた

フェルトは眩しくて目を閉じる

そしてフェルトは体に違和感があることに気がつく
体にゴツゴツしたものがくっついていた

目を開けると、そこにはエクシアとなつた刹那がいた
刹那はフェルトを下ろすと、敵に体を向ける

「隠れていろフェルト」

「う、うん」

刹那は右手の実体剣を展開した

「エクシア、刹那！セイエイ、目標を駆逐する！」

刹那は背中からGN粒子を吹かせて敵に突撃していく
フェルトは刹那を心配そうに見ていた

私はガジェットが出現したポイントに親友のフェイトちゃんと一緒に
に向かっていた

「最近、ガジェットの出現率高くない？」

「そうだね……あと、ここに来る途中でガジェットともう一つ魔力反
応がなかつた？」

「なのはも？」

「うやうやしくFヒートちゃんも感じたみたい

そして現場付近まで近づくと、そこでは、

「なのはーあれ…」

縁の粒子が空に向かつて溢れていた

最初は驚いたけど、すぐに別の感想が出てきた

「綺麗…」

「うん、そうだね…」

そしてその粒子は消えた

私たちはガジェットを目視できる距離まで近づいた
だが、ガジェットの中に先程の粒子を放出しながら、ガジェットを
切り裂いていく

下にはガジェットの残骸が転がっていた

「す、」「ーあのロボットが一体で？」

「とにかく行こうのはー」

「うんー。」

刹那は30機いた機体をひと桁まで減らしていた

「遅い！」

1機を後ろから横なぎに切り裂いて、近くにいるもつ1機に向かって、要背部のビームダガーを投げる
ビームダガーは1機に突き刺さり爆散する
すかさず刹那はビームライフルを放つが、敵に当たる前にビームが
弾かれた

「なに！？」

「マスター、あれはAMFと呼ばれるものです

「AMF？」

「マスターが使用するライフルはビームではなく魔法です。あれは
魔法を防ぐバリアのようなものです」

「… そうか」

刹那はここまで接近戦で戦っていた

今ここでの出力でのライフルは無意味だということが分かった

「なら接近戦でいく！」

刹那は実体剣を展開して、敵に切りかかる
そしてラスト1機になる

刹那は最後の1機に突撃する

「これが、俺たちの、ガンダムだ！！」

最後の1機をまつぶたつにして、刹那は実体剣を折りたたむ
そして地上に降りて刹那はバリアジャケットを解除して、フェルト
のもとへ向かう

「刹那、ケガはない？」

「ああ。問題ない」

「そう…よかつた」

フェルトが安堵した表情を見せる

「マスター、先ほどとは比べ物にならない魔力を感知しました」

「なに!? どこだ?」

「こちらに近づいています。これは…人です」

人か…なら情報も手に入れられるかもしねれない

刹那はそう思った

「刹那、あれ…」

フェルトが上に指を向けると、そこには茶髪の髪で白い服に身を包

んだ女性と金髪の髪をして黒い服に身を包んだ女性が降りてきた

「時空管理局です」

「時空管理局？」

刹那とフェルトが首をかしげていると頭に声が響いた

マスター、フェルト

(…なんだ、エクシアか?)

(頭に声が響く)

これは念話といつもので魔法の一種です。心で相手に話しかける
よつこすればできると思こます

ひつか?

刹那の声が聞こえる

時空管理局とは私たちの世界にあつた連邦のよつなものです

(連邦と同じ…)

なら、そこも…

「あの～聞いてますか?」

茶髪の女性が無視していると思われたのか、少し怒ったような声で

話しかける

「すまない」

「一つ聞きたいのですが、これはあなたがやったんですか？」

金髪の女性が指を指すと、その方向にはむきの機体の残骸が転がっていた

「ああ」

「なら詳しい話を聞きたいので、ついてきてもうひとつよろしいですか？」

フェルトは刹那を見る

「私は刹那を信じて付いていく

「…了解」

「あつ、申し遅れましたが、私は時空管理局機動六課スター・ズ分隊
隊長高町なのは一等空尉です」

「同じく機動六課ライトニング分隊隊長フェイト・T・ハラオウン
執務官です」

「フェルト・グレイスです！」

フェルトは礼儀正しく挨拶する

若干声が上ずっていたような気がした

「あなたは？」

「刹那・F・セイエイだ」

これが刹那とフェルトの異世界での戦いの始まり

episode 1 (後書き)

駄文ですが、読んでくれたら嬉しいです
意見などもお願いします

episode 2

刹那たちはなのはたちに連れられ、今は機動六課隊舎隊長室にいる刹那とフェルト前には茶髪のショートカットの女性と銀髪の髪の小さい少女が浮かんでいた

「はじめまして、機動六課部隊長ハ神はやてです」

「ラインフォース？ ですぅ！」

二人が挨拶してきたため、刹那とフェルトも挨拶する

「フェルト・グレイスです」

「刹那・F・セイエイだ」

自己紹介を終え、本題に入る

「早速ですが、二人はなぜ森にいたんですか？」

「わからない。俺たちは気がついたらあそこにいた。だが、こいつのおかげでこの世界のことについてはだいたい理解した」

刹那はポケットから青い宝石を取り出す

「はじめまして、マスターのデバイスのエクシアです」

『ー喋った！？』

「そんなんに珍しいんですか？」

フェルトが問う

「「」たなに高性能なデバイスは見たことがないよ」

なのはは驚いていた

「刹那さん、このデバイスをど「」で？」

これにはエクシアが答える

「私は「」の世界に来たときには「」の姿になつていきました。そしてマスターたちは地球から来ましたが、この世界の地球とは違つ地球、並行世界から来ました」

「並行世界と「」とは、一人は次元漂流者と「」とになるね」

「やうやく

「あの～次元漂流者ってなんですか？」

「何らかの拍子に他の次元世界に偶然漂流してしまった人たち、つまりは迷子のようなものですね」

「元の世界に帰る方法はないのか？」

「今のところはわかりません」

「やうやく…」

「みんな心配してるとだらうな…」

フェルトの頭の中に仲間たちの顔が浮かんでいく

「それで一人は今は泊まるとこはないといつ」とですね？」

「ああ」

刹那一人ならなんとかなるが、フェルトは…

「なら、機動六課で民間協力者として働いてみませんか？」

「どうしてですか？」

「ミッドチルダでは、無断でデバイスを持することは禁止なんですよ。民間協力者ならそういうことを未然に防げるし、それに時空管理局は正直言つて人員不足なんですよ。だから力を貸して欲しいんですよ」

「…わかった。ただしデバイスに関してはここ以外での情報開示は遠慮してくれないか？」

「わかりました」

これで刹那とフェルトの機動六課での戦いが決まった

「これからよろしく頼む。あと敬語は必要ない。慣れてないからな」

「うん。一人ともええな？」

「うん。これからよろしくね！刹那君！フェルトちゃん！エクシア
も！」

「よろしくね。刹那、フェルト、エクシア」

「よろしくお願ひします！」

フェルトは少々固かつた

「ハハッ、フェルトちゃん、敬語はいらないよ？」

フェルトは仲間の前でしか普通にしゃべらない

「はい」

「リイン、二人を隊舎の中の案内お願ひな」

「はいーはやてちゃん！行きましょう刹那さん、フェルトさん！」

「ああ。頼む」

「お願ひします」

そして三人は部屋を出でいった

刹那の強さに三人は驚いていた

「それにしてもここに男の人来るのも久しぶりやな」

「そうだね。六課はほとんどが女性だからね」

「それにしても一人とも、森のガジェットはどうなつてたん?」

「全部破壊されてたよ」

「どうゆうひ」とや?

「刹那君が全部破壊したと思つ」

「ほんまかい!?

「うん。それにまだまだ余裕みたいだつたよ?」

「とんでもないな、刹那君は…」

「それにしても刹那君でかつ」と言えな～

「これを刹那が聞いたり見つなるのだらうか…

「ああ、なのにはちゃんとこはコーー君があるからな～」

「はやいは一や一やしながらなのはを見る

「えつ？ コーー君はただの友達だよ？」

はやいとフロイトはその場ですつゝかる
そして皆田もしてこない無限書庫の同書長の恋は幕を閉じた

「フロイトやんば？」

なのははフロイトに話を振る

「私もやつ思つたが、それ以上に刹那の皿には決意とか悲しみとか
があつた気がする」

「どうしてやつ思つたの？」

「刹那の皿を見ると、何か私と似たような皿をしていたから…過去
に何かあつた思つただ

「でも」れは刹那君の口から聞くしかなによね

「やうやな。それに過去はどうあれ、明日から仲間なんやーみんな
で何があればフォローしたるつー？」

「うん！」

「そうだね」

そして刹那に頼もしい仲間が出来た
フラグ予備軍もね…

機動六課の中を案内された二人は、リインに連れていってもらった
自分たちが使用する部屋にいた

「どうしたらいい？」

部屋には最低限の物資は置いてあった
だが、問題はベッドが一つしかないということだ

「フェルト、俺はソファーで寝る」

そう言って刹那はソファーの上で横になる

疲れが刹那の体を蝕んでいた

刹那が眠りに就こうとしたその時、フェルトが刹那の腕を引っ張った

「どうした？」

刹那が見ると、フェルトの顔は少し赤かった
少しもじもじしているし…

「刹那、一緒に寝ない？」

「…ハツ？」

そう言つとフェルトの顔がさらに赤くなつた

「刹那は戦つた後なんだからちゃんと休まなくちゃ…」

さらに赤くなつている

これではフェルトが爆発するのではないかと思つた刹那はため息を
つきながら答える

「…わかつた」

フェルトの顔が明るくなつた

(マスターも罪な男ですね)

エクシアはそう思つた

そして一人は結局二人で寝ることになつた

episode 2 (後書き)

今回は短めです

意見などあつたらよろしく！

なにかリクエストもあればおねがいします！頑張ってみるんで！

episode 3

刹那は夢を見ていた

白い服を着た茶髪のツインテールの少女と黒い服に身を包み金髪のツインテールの少女が戦っていた

戦況は金髪の少女の方が有利だった

結果は金髪の少女の勝利という形で終わつた
だが、金髪の少女の表情はどこか悲しそうな表情をしていた
そしてそこで映像は途切れ辺りが真っ白になつていく

「うう…」

「刹那、大丈夫？」

「…ああ。心配ない」

刹那は目を覚ますとフェルトがCBの制服を着て隣で刹那の心配をする

（あれは一体…？）

刹那は夢のことを疑問に思つたが、あの一人が誰かなのかは曖昧だった

ただ、なぜあの夢を見たのかはわからない
刹那はため息をつきながら時計を見る

「六時……」

「少し早く起きちゃったね…どうするの?」

早く起きたからといって刹那たちは特にやることはないなかつた
しばらく悩み、フュルトが提案した

「なら、隊舎内を見回つてみない? 昨日も見たけど全部は見れてないし…どうかな?」

「別に構わないが…」

「なら行こう…」

そして刹那はCBの制服に着替え、フュルトと共に隊舎内を歩くことになった

刹那とフェルトが隊舎内を歩いていると、何処からか物音が聞こえてきた

「なんだろう？」

「向こうから聞こえますね」

「…行ってみよう」

そして二人は物音がする方へ歩いていった

刹那たちが向かった先では、海の上にビル群の廃墟があつた

「あつ、刹那君とフェルトちゃんおはようー！」

「二人ともおはよう」

すると、こちらに手を振っている高町なのはとフェイト・T・ハラ
オウンの姿があつた

「おはよう」

「おはよう」

二人は挨拶をすると、前方に映っている映像の方に目を向けた

そこでは四人組の子供がガジェットと戦っていた
それを見た刹那は顔を険しくした

(なぜ子供を戦わせている? ここの人間はなんとも思わないのか?)

刹那はそう思った

反政府組織力タロンの基地には子供がいた
だが、彼らは子供たちを戦わせたり、戦いをさせるために育てている
わけではなかつた

だが、ここの人間はどうだ?

平気で子供を戦わせてそれを見て心の中でどう思つてゐるのかは知
らないが、平気な顔でそれを見ている

刹那は時空管理局に歪みを感じた

だが、刹那のやることは変わらない

歪みがあればそれを断ち切る

そして刹那は心の中でその歪みを断ち切ることを決意した

『私も手伝いますよマスター。私はマスターと共にありますから』

エクシアから念話が聞こえ、刹那は心の中で感謝した

「お前たちが例の民間協力者か?」

すると刹那とフェルトは後ろを振り向くと、そこにはフェルトの髪
より薄いピンク色のポーテールの髪をし凜とした雰囲気を持った
女性と小さい活気溢れた子供? がいた

「誰だ?」

「すまない。私はシグナムだ」

「ヴィータ」

「フルト・グレイスです。よろしくお願いします」

「刹那・F・セイエイだ。どう呼んでもらっても構わない」

「そりか…ならばセイエイ! 私と模擬戦をしてくれないか?」

「なんだこいつ? 戦うことが好きなのか?」

だが奴とは違つて強い奴と戦つてみたいという感じだと、刹那は思った

「了解した」

『すまねえな。あいつはいつもいつも感じなんだ』

念話で、ヴィータが謝つてきた

刹那は気にするなと念話を送つた

「じゃあ、一人の模擬戦だね…みんな訓練一日中止!」

なのはが廃墟にいる四人組にそつ言つと、こちらに四人が向かつてきた

「なのはさん、一体何があるんですか?」

青い髪の少女がなのはに訊く

「え~とまづ自己紹介からだね。これから民間協力者として一緒に

戦うことになる刹那さんとフェルトさんだよ

「フェルト・グレイスです。これからよろしくね」

「刹那・F・セイエイだ。よろしく頼む」

「はい、みんなも自己紹介」

なのはに言われて、四人も自己紹介をする

「スター・ズ3、スバル・ナカジマ二等陸士です！」

「スター・ズ4、ティアナ・ランスター二等陸士であります！」

「ライトニング3、エリオ・モンティアル三等陸士であります！」

「ライトニング4、キャロル・ル・ルシエ三等陸士です！それとこの子はフリードリヒです」

「キュル～」

刹那とフェルトは目の前にいる竜を見て驚いていた
フェルトは子供たちを見て何か疑問に思っていたが、それを口することにはなかった

「自己紹介も済んだな…ならばセイエイ模擬戦を始めよー！」

「了解」

「刹那！」

刹那は後ろを振り向くと、そこには心配そうな瞳で刹那を見るフルトがいた

「怪我…しないでね？」

「…わかつてこむ」

そう言つて刹那はシグナムと共に廃墟に向かつていった
フェルトは先ほどの田とは違つた田で刹那を見ていた

「それにしてもすゞいですね。海の上に廃墟があるなんて」

「…やはは…実はこれ本物じゃないんだ…」

空中にモニターが現れ、そこにはなのはの顔が映し出されていった

「ホログラムのようなものか？」

「う～ん、だいたいそんな感じかな」

なら相当高度な技術だらう
ソレスタイルビーイングでさえも多分」「まではできないだらう、と
刹那とエクシアは思つていた

「そろそろ始めるか、セイエイ」

「そうだな…エクシア武器は全て非殺傷設定にしてあるか?」

「もちろんです」

「すまない。感謝する」

そして刹那は目を瞑り、頭の中でイメージする
イメージを完了したと同時に刹那は瞼を開き、

「エクシア、セットアップ!」

刹那はガンダムエクシアとなつた

刹那たちの模擬戦を見るメンバーは刹那の姿に驚いていた
服が変わり、体が騎士甲冑に似ているが、顔はV字のアンテナのよう
なものがあり顔は隠され、どこか青と白をベースとした機械のよ
うなものを身にまとい、右手には折り畳まれた大剣、腰には大小二
本の実体剣を装備した刹那の姿があつた
背中からは淡い緑色の粒子が放出されていた

「かつこいいですね…」

「そうだね…最初見たときもそれ思ったよ

エリオとのは感想を述べる

「それにしても刹那から何か不思議な空気を感じるんだけど…」

フェイトの言葉になのはどヴィータ、そしてフェルトは気がついて
いた
さつきまでとは何か違つ雰囲気を感じている二人だった

「刹那…」

フェルトは刹那をずっと見ていた

シグナムは刹那の姿を見て驚いていた

「それがお前のデバイスか？」

「そうだ…これが俺のガンダム、『ガンダムエクシア』だ」

「フッ…では始めるか」

そう言うとシグナムは剣を構える

刹那も右手のGNソード改を展開して構えた

そして二人の戦いが始まる

「ヴォルケンリッターが将、烈火の将シグナム参る！！」

「ガンダムエクシア、刹那・F・セイエイ、出る！！」

そして二人の模擬戦が始まった

episode3 (後書き)

いや～今回は何となく頑張ってみました！

これまでしたのは初めてだと思います

ただし、戦闘描写がうまく書けるか不安…

意見やリクエストもどしどし送ってくださいー。

コーナージャなくしていいですかねー。

刹那VSシグナムの模擬戦が開始した
最初に動き出したのは刹那だった
背中のGN粒子を吹かしてシグナムに近づき、右手のGNソード改
を振りかぶる

GNソード改をシグナムに振り下ろす
シグナムはすかさずデバイス『レヴァンティン』でGNソード改を受け止める

卷之二

思つたよりパワーがあつたのかシグナムの体は少し後ろに押されて
しまつ

剣那は一度ソーラー改をもう一度シクナムに呪わうとするかシグナムは少し距離を離す

そしてシグナムの表情には笑みがこぼれていた

「 もんなセトヒヤ。只者ではござりませぬか、感じさせただが」
「 まどしさな」

今の一撃で刹那が常人とは違つことが分かつたらしい
シグナムは嬉しそうだった
刹那は再びソード改を構える
シグナムも剣を構える

「レヴァンティンー カートリッジロードー」

ガシュン×1

すると、シグナムの剣は炎を纏う
それを見た刹那は驚くが、すぐに警戒をする
警戒する刹那にエクシアから念話が耳に響いた

『マスターあればカートリッジシステムです』

『カートリッジシステム?』

『よつは一時的により強力な攻撃が可能だということです』

『そりか…お前にはついていないのか?』

『私にも一応あります、この状態では使用は難しいかと…』

『そりか』

そしてエクシアとの念話を終えて刹那は再び前方にいるシグナムに
意識を集中させる
だが、シグナムは刹那がエクシアと念話をしている時攻めではこな
かつた

『もう念話は済んだか?』

『……気づいていたのか?』

「正々堂々と戦わなくては騎士としてのプライドが許せん」

「そりか……なら！」

「行くぞ！」

シグナムが炎を纏つた剣を構えながら刹那に突進してくる
それに対し刹那はGNソード改を折り畳みソードライフル改で応
戦する

桃色の光がシグナムに向かつて放たれるが、シグナムはそれをこと
ごとく避け、刹那に接近する

そしてシグナムは飛び上がり、刹那に向かつて剣を振り下ろす

「紫電一閃！！」

刹那はそれを再び展開したGNソード改で受け止めるが、シグナム
の方が若干パワーが上なのか少しづつ押しやられる
だが、刹那は踏ん張つてGNソード改を横なぎに払う
シグナムは後ろに飛んで再び刹那と皿を合わせる

その頃刹那とシグナムの模擬戦を見ているメンバーは戦いをじっと
見ていた

FW四人は啞然としていた

「すうじい。シグナムとほとんど互角…」

フェイトが戦いを見ながら感想を述べる
たしかに刹那はこの手の戦いは一回目だが、あのシグナムとあそこ
まで戦える人間はぞらにいない

「それに刹那君まだまだ余裕がありそうだよ」

映像見ながらのはは刹那を見ながらそつまつ
顔は隠れてよく見えないが、まだ余裕という感じがした
すると、ティアナがなのはに質問する

「なのはさん、彼は何者なんですか？」

「彼は次元漂流者で魔法での戦闘は一回目だよ」

「そうですか……ありがとうございました」

そう言つティアナの表情は明らかに暗くそして何か悔しそうだった
エリオも刹那の戦いに見惚れていた

「フェルト、刹那ならきっと大丈夫だよ」

フェイトにそう言われたフェルトは頷いたあと再び画面に目を戻した

刹那とシケナムの戦いはほぼ互角だった

卷之二

刹那がソードライフル改でシグナムを狙い撃つ
だが、それをシグナムは剣で防いだりよけたりして隙すら作れない
そしてシグナムが再びカートリッジロードをして剣から炎が溢れる

「紫電一閃！！」

۱۰۷

シグナムの剣を受け止めるが、威力を相殺しきれず吹っ飛ばされてしまつ

「波女ねず」——である。マスターを二三まで追うて、

エクシアはシグナムを高評価した

そして剣那は体を起して、要體部のG2ヒーハタガーを抜いて視界が悪い中それを放る

一見闇雲に投げたように見えるが、刹那是相手がどこにいるか分かつているかのように投げた

そして刹那は再びGNソード改を構えて移動する

刹那をビルに吹っ飛ばしたシグナムは刹那が出てくるのを待っていた
すると、シグナムに向かつて煙の中から飛んできた
それを見たシグナムは油断していたわけではないが、少し反応が遅
れたためそれをよける
だが、よけた方向が悪かった

「つおおおおおおおおおー！」

「ー」

シグナムはよけた方向を見るとやはりGNソード改を構えてこちらに突っ込んでくる刹那がいた

「ハアアアアアアアアアーー！」

「ぐうーー！」

「モーー！」

「！」

GNソード改を受け止めるシグナムだが、そこからすかさず蹴りを入れてきた

蹴られた腹を押さえて刹那を見るが、刹那はビームサーベルを抜いてシグナムに切りかかる

それに反応できなかつたシグナムは咄嗟に目を瞑みだが、痛みなどは来なかつた

ゆっくり目を開けると、目の前には桃色の光が止まっていた

「俺の勝ちだ」

「…フツ…そうだな」

模擬戦は刹那の勝利で幕を閉じた

episode 4 (後書き)

なんか戦闘描写がうまく書けん…

本当にこれを読んでいる人はリクエストなどはないのですか？

可能な限り尽力しますよ

episode5(前書き)

10000PV突破!

よかつた!頑張つてよかつた!

episode 5

刹那がビルに吹っ飛ばされた時、模擬戦を見ているメンバー

「やつすぎだと思つけどなシグナム副隊長」

若干苦笑いをしながら呟つのは

「仕方ねえよ。あいつはバトルマニアで一旦スイッチが入ると加減とかきかなくなっちゃうんだからな」

「でも、やっぱ二回戻の戦闘でここまでする必要はないと思つけどな…」

すると、煙の中からシグナムに向けて刹那が放ったGNビームダガーが飛んでくる

「つそつー？あんな視界が悪い中であそこまで正確に狙えるなんて！？」

「まるで見えているかのようなコントロールだね」

スバルの疑問にフロイトの考えを述べる

そしてシグナムがそれをよけると、よけた方向にはGNソード改を構えているシグナムに接近する刹那がいた

シグナムがGNソード改を受け止めるが、刹那が蹴りを入れてシグナムをビルにぶつける

そして刹那がビームサーベルを引き抜く

シグナムは反応に遅れて躰すことができず、ビームサーベルはシグ

ナムの目の前で止められて勝負は刹那の勝利で終了した

「シグナム副隊長が負けた……？」

ティアナは驚いていた

魔力ランクや戦闘経験からいつて六課の中でもトップクラスであるシグナムを戦闘回数がまだ一回の民間協力者に負けたのだからそしてティアナは心の中で悔しがる

「よかつた刹那…私も…！」

フェルトは心の中で何かを決心した

その頃刹那とシグナム

「強いなセイエイ。お前の強さは底が知れん」

「そんなことはない。俺の戦いは……人を傷つけるだけだ……」

「？最後の方が聞こえんのだが…」

「いや、なんでもない」

刹那の発言がうまく聞こえないシグナム
それはどこか悲しそうだった

「立てるか？」

「いや、先程の蹴りと衝撃で思つよつて体が動かん…」

「…そつか」

そして刹那がシグナムを抱きかかる

「／＼＼セ、セイエイ！？」

「どうした？」

「い、いや…これは／＼／

刹那は動けないシグナムをお姫さまだっこで抱える
シグナムは顔を赤くするが、刹那はそれを気にしない
そして二人はフェルト達のもとへ向かった

そしてフェルトたちは刹那たちのもとへ向かおうとしていたが、

「おっ、」ソロから行く必要はないみたいだぜ」

「えつ？」

ヴィータがそう言って上方を見ると、刹那がシグナムを抱きかかえてこちらに向かってきていた

お姫さまだっこでこちらに向かってているのだ

そして降り立ち、刹那はバリアジャケットを解いてソレスタークリーニングの制服になる

「セ、セイエイ、そろそろ下ろしてもらひて構わない…周囲の目線
が痛い／＼／＼

「?わかった

そして刹那はシグナムを下ろす
シグナムは相変わらず顔が赤い
刹那は風邪かと思っていた

「せ、刹那、どうしてシグナムさんを？」

「?…ああ、動けそういうみたいだったからな。ああをせてもうつ
た」

「そ、そつ

フェルトの問いに刹那は無表情で答える

「シャーリー、刹那君の能力どうだった?」

すると、いつの間にか眼鏡をかけている女性がいた

「あなたは?」

「どうもシャリオ・フィニーーノです。シャーリーと呼んでください。皆さんのデバイスの整備などしています。それと…」

「?」

「あなたのデバイスを調べてもいいですか!?」

「断る」

即答したことによりシャーリーの元気が少し失われる

「ハハハッ…それでシャーリーどうだった?」

「あつはい!刹那さんの魔力値は55ランクでした!」

「うわー?」

「マジでかー?」

フェイトとヴィータが驚きの声を上げた

「相変わらずす」「なんだね刹那は…」

「やうなのか?」

「それにしても刹那さん、すいへかつによかったです!」

エリオが刹那に近づいてきて、感想を言ひ

「エリオは刹那の試合を見てはしゃいでいたんだよ」

「フフ、フハイトさん——」

エリオが顔を真っ赤にしながらやうに笑いつ
そして模擬戦はここでお開きとなつた

医務室では、刹那とシグナムが怪我したところを治療していく

「はい!これで終わり!」

「相変わらず料理以外は腕がいいな」

「むう～ シグナム、以外は余計よ…」

シグナムの言葉に敏感に反応するシャマル
刹那はシャマルの治療を見て心の中で感心する

「それにしても刹那君すごいね…シグナム副隊長を倒しちゃうなんて…」

なのはが再び感想を述べる

「だが、セイエイはあのが本当の実力とは思えない」

「シグナムはあのが刹那君がまだ本気じやないと言いたいんか？」

「はい」

「そつなの刹那！？」

フェイトが訊く

「いや、多分あのが今の俺の実力だろ？ そうだなエクシア」

「はい。現時点ではそうなりますね」

(現時点ではつて、Uランクより実力があるつていうんか！?)

はやてが心の中でそつ思った
てか模擬戦のとき出していなかつた(焦)(作者)

「刹那、今日はそつするの？」

実際、今日は特にこれといってやることはなかつた

「まだエクシアを使いこなせていないからな。後で訓練でもするさ」

「そつか。無茶はダメだよ」

「分かつていい」

「フェルトちゃんて刹那君のこと、そこまで心配しているんだね」

「はい。これ以上大切な人を失いたくありませんから」

「えつ？あつ？」めんなり

「いえ、過去を気にしていても何もありませんから」

フェルトは少し表情を暗くするが、すぐにそれはなくなつた
刹那とエクシアはフェルトがここまで強くなつていたことに今さら
気がついた

そしてその場はお開きとなつた

episode 5 (後書き)

さあ次回は初出動となるかな！？

今のところクエストは刹フェルといつ要望が強いですねー。一票だけ…

アンケートもやむつかと思つので、リクエストや意見もよろしくお願ひしますー。

コーナーじゃなくともOKです！

episode 6

刹那はあの後FW陣の訓練が終わったあとに自分も訓練をした
今までだったらエクシアの力を十分に發揮できないからである
そして今は訓練が終わつたため、食堂にいる
隣にはフェルトがいる

「それでどうだつた、エクシアは使いこなせそう?」

「わからないが、エクシアは俺のガンダムだ。必ず使いこなしてみ
せるぞ」

「そう。…そうだよね」

そして二人はその後は何も喋らないで飯を黙々と食べ続ける
その沈黙を破つたのがエクシアだつた

「マスター、トランザムのデータの構築が終了しました。あと、G
ンシールドも装備可能となりました」

「そうか。…エクシア、『ダブルオー』の状態はどうなつてゐる?」

「『ダブルオー』に関してはデータはあります。ですが、まだまだ
時間はかかりますし、オーライザーも構築しなければなりませんか
ら」

「そうか…引き続き頼む」

「了解しました」

刹那はエクシアに、ダブルオーの「データがある」と言われそれを造つてもらっていた

エクシアだけではこの先は厳しいしそれに刹那は嫌な感じがしていた
そう遠くない時に何かが起きるような気がしていた

「刹那、どうかした？」

フェルトが刹那の顔をのぞき込んでくる

感情が表情に出ていたのだと刹那は思い、「気にするな」と言った
フェルトは「そっか」と言って再び食を進める

そして二人は食事を終えて食堂を後にして、部屋に向かう

「あれ? 一人とも、もう夕食終えたの?」

歩いているとなのはが一人に聞いていくる

「はい」

「そつなんだ。あつ、刹那君明日も訓練するの?」

「そのつもりだ」

「そつか。じゃあまた明日ね」

「ああ」

「おやすみなさい」

そして一人は再び部屋に向かう

一方隊長室では隊長陣が会話をしていた

「今更だけどシグナムが負けるなんてな～」

話は刹那とシグナムの模擬戦のことである

「そうだよね。まだ魔法を使ってでの戦闘が一回目なのにシグナムに勝つっちゃうなんて」

フロイトは心底驚いていた

「私もセイエイは只者じゃないことは想つていたがあそこまどとは思わなかつたな」

「でも、視界が悪い中であそこまで正確に狙いを定めることなんて難しいんやないか？」

はやての前に映像が映し出される

それは煙の中からナイフにも似たものが飛んできてそれをシグナムが躰しているところだ
たしかにこれはデバイスの補助を受けていても難しいだろう

だが、それを刹那はやつてのけた

「はい。私もあれを見てみてただのまぐれかと思いましたが、あの後のセイエイの行動を見る限りあれは狙つて行なつたものだと思います」

「やつぱりか……」

「シグナムは刹那から何か感じた?」

「どうした? テスター口ッサ

「いや、ここで刹那と話している時やバリアジャケットを展開するとき何かを感じたから……シグナムはどうだつた?」

シグナムは少し考え込むような態度を見せる

「最初は分からなかつたが、剣を交えているとセイエイからは決意にも似たようなものを感じはしたが……それがどうかしたのか?」

「いえ……それならいいんですが……」

フェイトは少し納得がいかないようだつた
だが、話ははやってによって切り替えられる

「それにしても刹那君に抱つこされているときシグナムの顔が赤かつたのはおもうかつたな」

それを聞いたシグナムを含むメンバーは顔を赤くした

「それでどうやったんや？刹那君の近くにいて」

「わかりませんよーー！ただ、恥ずかしいといつ気持ちしか…／＼」

シグナムも騎士とはいえ一人の女性だ
あんなことを平然とやられれば恥ずかしい気持ちにはなるだひつ

「そりなんやな…シグナムは刹那君に…」

「主？」

「私も負けへんからな！シグナム！」

「…ハツ？」

はやてを除く全員ははやでが何を言つて居るのかよくわからなかつた
ただ、フェイトはこの意味を理解したらしく心の中で闘志を燃やして
いた

刹那とフェルトは部屋に着いたあと、一人ともベッドに腰掛けていた

「… ハクシア」

「どうしたんですか？フェルト」

フェルトがエクシアに話しかける

「私に『デバイスを作つてくれないかな？』

それを聞いた刹那は驚いた表情でフェルトを見る
エクシアは予測をしていたのか驚いているのか黙つている

「私も刹那と一緒に戦いたい。そして刹那を守りたい」

「…フェルト…」

フェルトの瞳は決意の意思で満ちていた

「…エクシア、どうなんだ？」

「私の中にある他のガンダムのデータを使い、シャーリーに頼めば
可能だと思います」

「そつか…ありがとうございます、エクシア」

フェルトは微笑みながら礼を言つ

「しかし…いいのか？」

「私だけ戦わないのはダメだと思う。刹那とここの人たちを守りた
いの」

「……わかった。明日、シャーリーにきいてみよう

「ありがとう刹那」

そして二人は今回はフェルトがベッドで刹那がソファーで眠ることになった

episode 6 (後書き)

さて、いよいよフェルトにもデバイスが！？

ここではアンケートです

フェルトのデバイスの名前と武器は何がいいですか？

なるべくフェルトに負担がかからないようにお願いします

そしてバリアジャケットのデザインも追記でお願いします

来週の土曜日までとします

短い期間ですがいろいろな意見を待っています

episode7(前書き)

アンケートはあと五日です

アンケートが終了したと同時にキャラクター設定を書きたいと思いま
す

では、アンケートよろしくへー！

フェルトは夢を見ていた

石造りの家がいくつもあり、人はどう見ても中東の人々であった
だが、景色が変わり夜となる

そして一人の少年が一件の家に向かつて走っている
その少年はフェルトが知る人物によく似た人物だった
そして少年は家中に入る

家からは少年を心配していたと思わせる男性と女性の声が聞こえる
だが、それは安堵の声から何かに恐怖しているような声に変わる
視点が変わり、フェルトはその家中を見ていた

少年が一人に銃を向けており、一人とも怯えている

だが、それを見る少年の目は特に何も思っていないような操られて
いるような赤い瞳をしていた

そして銃声が鳴り響くと一人のところから赤い液体が溢れ出してくる
そして家から出していく少年の目はやはり何かに操られているような
瞳をしていた

そこで意識が薄れてくる

「う、ん…あれ？」

フェルトは目を覚ますと体を起こして夢のことを思い出して考える

(あれって、刹那…なのかな？でも…それだったら…)

フェルトはそう思いながらソファーで眠っている刹那を見る
ソレスタークリーイングは仲間の過去の情報は太陽炉と同じくソレベルの機密事項である

仲間の過去を知っていたとしても「じくわづかのことしか知らない
もちろんフェルトも仲間の過去を全て知っているわけではない
そんなことを知らなくてもソレスタークリーイングはフェルトの全て
であるためそのようなことは関係なく全員が仲間を信じている
だが、フェルトは先程見た夢がどうしても気になる

刹那が中東出身ぐらいしか知らないフェルトは今回の夢で刹那が過去にどのような人生をおくつていたのか気になってしまった

でも、それを知るのは難しいだろうとフェルトは思った

そして時計を見ると、そろそろFWの午前の練習が終わる頃で少し
眠りすぎたかなと思いながらフェルトはベッドから出て顔を洗い、
ソレスタークリーイングの制服に腕を通す

「おはようございます、フェルト」

「うん。おはようエクシア」

エクシアに話しかけられたフェルトは挨拶をして刹那を起こす
そして起きた刹那にフェルトは笑顔で朝の挨拶をして、刹那は顔を
洗い制服に着替える

そして二人は部屋を出て食堂に向かう

食堂で朝食をとった刹那とフェルトはデバイスルームに向かっていた
理由は昨日話していたフェルトのデバイスについてである
そのことをシャーリーに話すために一人はデバイスルームに向かつ
ていた

そして、デバイスルームの前につき、ドアが開くとなのはとシャーリーとリインとFWの四人がいた

「あっ、刹那君、フェルトちゃんおはよう」

「おはよう」やむこ

「ああ」

フェルトと刹那は普通に挨拶をする

「一体、みんなでどうしたんですか？」

「ああ～、FWの新デバイスについて説明をしていたんですね」

「新デバイス？」

刹那とフェルトは映像に映つてゐるものを見る
そこには待機状態のデバイスと思われるものがあった

「おー！人はどうしてここへ？」

エリオに聞かれる

「フェルトのデバイスを作つてもらいにきました」

「フェルトちゃんの？」

エクシアの言葉になのはが反応する

「彼女が自ら望んだ」とです。六課の人たちとマスターを守りたい
のでしよう」

それを聞いたなのははフェルトを見ると、決意の顔でなのはを見て
いた

「…うん。シャーリー、フェルトちゃんのデバイスを作つてくれな
いかな？」

「いいんですか？なのはさん」

「本人が望んでいる」となら止められない。それにフェルトちゃん
のことは私たちが守るしね？刹那君？」

「…俺がフェルトを守る」

刹那は当たり前と言わんばかりの口調で言う

それを聞いたフェルトは少し頬が紅潮していたが刹那は気づかない

「フェルトのデバイスには今から送るデータを参考にしてください」

そしてエクシアからデータが送られる

それを見たシャーリーは鼻息を荒くしながらモニターを見ていた
そのシャーリーを見た全員が彼女が一瞬違う人物に見えたようだった
すると、赤いランプと警報が鳴る

「一級警戒体制！？」

「グリフィス君！」

「はい！教会本部から出動要請です！」

そしてこれが機動六課、最初の任務である

現在、機動六課FW陣はヘリに乗り込み移動していた

内容は山岳リニアレールに積まれているロストロギア『レリック』の回収である

だが、リニアレールは三十機のガジェットの一 部に侵入され、制御不能に陥つてた

未確認のガジェットも確認されていた

刹那とフェルトはその場で聞いたロストロギアという言葉を聞いて疑問におもつていたが、リインが教えてくれ意味を理解した

そしてこの場には今はフェルトはいない

フェイトもこの場にはいないが後で合流するそうだ

(なんだ? この感じは…)

刹那は何かを感じていた

この任務で刹那は何かが出てくるような気がしていた

「ヴァイス君、私も出るよ。私とフェイト隊長と二人で空を抑える！」

「うつす。なのはさんお願いします！」

そしてヘリのハッチが開かれる
なのはが出撃準備に入る

「キヤロ…」

なのはがキヤロに近づく

「そんなに緊張しなくていいんだよ。離れてても通信で繋がってる。
一人じゃないから。キヤロの魔法は誰よりも強くて優しい魔法なん
だから…ねつ？」

そしてなのはが再び出ようとすると、刹那もハッチに近づく

「刹那さん？」「したんですか？」

「…俺も出る。たぶん」のままで終わらない。そんな気がする

「刹那君…。うん。わかった」

「ありがとう」

少し微笑むとそれを見たなのはが少し顔を赤くする
が、刹那はすぐに元の表情に戻る

そして、なのはが飛び降りる

「レイジングハート、セーツトアップー！」

そしてなのはを桜色の光が包み込み、そこから出てきたのは白いドレスにも似たバリアジャケットを着て手に杖を持ったなのはがいた

「スタートー、高町なのは、行きますー！」

そして刹那はFW陣を見る

「お前たちは強い。その力を使つのであれば目的を見失うな」

そして刹那はティアナの頭の上に手を置く

「お前が何を考えているのかはわからない。だが、お前はひとりじやないんだ」

その言葉を聞いたティアナは意味が分かっていないような表情をしていた

そして刹那は再びハツチの前に出る

「お前たちは目の前にことに集中しろ。何かあれば援護する」

「…………はい！！」

「……行くぞ、エクシア」

「了解」

「エクシア、セットアップ！」

そして刹那はガンダムエクシアになる

「ガンダムエクシア、刹那・F・セイエイ…目標を駆逐する…！」

青白い粒子を吹かせて刹那は出撃した

ヘリから出撃した刹那を見ていた者がいた
その男は不敵に笑っていた

episode 7 (後書き)

今回はかなり省略したところがあります

グダグダな駄文ですみません

意見やリクエスト、アンケートをお願いします！

episode8（前書き）

アンケートの途中経過！

今のところはデュナメス、ケルティム、ヴァーチェ、セラヴィーが多いですね

デバイス名は上のものとオリジナルのものがありますが、私としてはオリジナルがいいのですが…

ということでアンケートは土曜日までですよー

待ってます

あとPV2万超え！やった————！

episode 8

刹那はなのはとともに空中にいるガジェットを殲滅していた

「アクセルシユーター…シユーネーネット…！」

桜色の大量の魔力弾が何機ものガジェットを破壊する
刹那もGNソード改とGNブレイドで敵を切り裂いていく

「遅い…！」

後ろに回り込んでガジェットを切り裂く

一人が接近して破壊してもう一人が中、遠距離でガジェットを落と
していく

二人の連携は初めてにしてはなかなかのものだつた

そして刹那はGNソード改を折り畳み、GNブレイドも腰にマウン
トして要背部のGNビームダガーをガジェットに放る

ダガーはガジェットに当たり爆散する

「…なのは…」

刹那はすかさずなのはの後ろにいたガジェットにGNソードライフ
ル改を連射する

だが、ビームはガジェットに当たる前に霧散して消える

刹那は心の中で舌打ちをする

「エクシア！」

「了解！」

そして背中についているGライドライブの回転数が上がり先程より粒子放出量が上がり、粒子圧縮率を上げる
そして再びビームを放ち、今度はAMFを貫通して敵に当たり爆散する

刹那はそのままなのはに背をあずける

「『いやはは…あつがとう刹那君』

「油断するな。…来たか」

「えつ？」

すると、敵のガジュットの一機が黄色い三田田形の斬撃によつて破壊される

「なのはー・刹那ー！」

「フュイトがやつて來た

「遅れて』めん…』

「ひつん。平氣だよ」

なのはは笑顔で答えるとすぐに表情が変わり田の前のJETに集中する

「…行くぞ」

「「「うん！！」」

そして刹那はGNソード改を展開して敵に切りかかり、なのはは中距離攻撃で敵を撃ち落とし、フェイトも刹那と同じように切りかか
り時々ハーケンセイバーで敵を破壊していく

刹那はGN粒子を吹かせて左手にGNブレイドを持ち、接近戦で敵
を落としていく

だが、刹那は出撃してから何か頭に響くものがあった

（なんだ？）これは…脳量子波なのか？この世界で？）

刹那は頭に響いてくるものが脳量子波だと考えた
そう考えていたうちに空中のガジェットを殲滅した刹那たち

「いちらりロングアーチ！空中のガジェット反応消失！」

ロングアーチからの通信で空中のガジェットは殲滅したことが分か
つた

三人は一箇所に集まる
だが、再びロングアーチから通信が入る

「！スターズ分隊、ライトニング分隊にガジェット以外の反応が接
近中！」

「ガジェット以外の反応！？」

「シャーリー！それはなんなの！？」

「わかりません！その反応の周りだけジャミングがひびく…」

「エクシア、まさか…」

刹那はある一つの可能性にたどり着く
だが、それはありえないと思つた
そんなことはありえない。そんなことがあれば自分たち以外に刹那
たちの世界から来たといつことになるからだ
だが、エクシアもその可能性にたどり着いていた

「おや、リブリードライヴ搭載型でしうね… それも擬似太陽炉搭載
型」

「といひとは、俺たちの世界から來たものがほかにいるといつの
か？」

「その可能性が非常に高いでしょうね」

「スター・ズー！ ライトー！ シングー！ 急いで救援に向かってください！」

「「「了解！」」」

「俺たちも行くぞエクシア！」

「了解！」

そして刹那たちはリニアレールに向かつて飛翔した

その頃四人はガジェットを全機破壊してレリックを回収した
回収する前にエリオが新型のガジェットに投げ飛ばされて意識を失
つたまま落下して、それを追うようにキヤロも飛び降りてエリオを
抱きとめる

この時ロングアーチとフェルトは焦ったが、はやてを含む隊長陣は
平然としていた

その理由はこれによりガジェットから発せられるAMFの効力が弱
まり、キヤロの本当の力が發揮されるためである
そしてキヤロは使役竜フリードに一言謝りそして覚悟を示し、キヤ
ロのレアスキル『竜魂召喚』を発動して巨大化したフリードを完全
に操ることに成功。そして目を覚ましたエリオとともに新型ガジェ
ットを破壊するなどとハラハラする場面があった
リインは操縦室でリニアレールの暴走を止めた
そして四人とリインはレリックを回収したことで警戒を緩めていた
だが、

「こちらロングアーチ！今そちらにアンノウンが接近中！」

「えっ！？どうしようティア！？」

スバルは慌てていた

「わからないわよ！」

ティアナも少し冷静ではなかった

アンノウンが現れたことで動搖していた

「今そちらに隊長たちと刹那さんが向かっていますーその間…ザ…ザ…ザ…」

「えつー…? シャーリー…どうしたんですかー! ?」

シャーリーからの通信がノイズが入って切れてしまう
すると、車両が爆発音とともに揺れ始める

「えつー…? なつ何ー! ?」

「何が起きているんですかー! ? シャーリーさんー!」

いくら呼んでも通信が帰つてこない
すると、車両の天井が破壊される
三人は目を瞑り目を手で隠す
そして音が止み目をゆっくり開け上を見上げると、そこには漆黒にも似た色のボディをして肩には砲台、そして最大の特徴である背中から放出されている赤いGN粒子を放出している機体がこちらを見下ろしていた

刹那たちが到着すると、刹那はその機体を見て
エイスで覆われているためわからないが
その機体は過去に窮地に陥った刹那たちを助け、刹那たちが彼らの
行為を紛争帮助対象として武力介入をして、そのあとあの男によつ
て殺されたパイロットの一人が乗つていた一機
その名は

「ガンダムスローネ！？」

ヨハン・トリニティが搭乗していた機体『ガンダムスローネアイン』
であった

「マスター！あそこにはスバルさんたちがいます！」

「…行くよ、フェイントちゃん！」

「うん！」

「…待て！あれば俺たちの世界の機体だ。俺とエクシアでやる」

「でも…」

「心配するな…」

そして刹那はスローネに接近する
スローネもこちちらに気がついたのか、こちちら体を向けてビームラ
イフルを放つ

「エクシア！GNシールド、展開！」

顔はフルフ

目を見開いていた

刹那たちが彼らの

行為を紛争帮助対象として武力介入をして、そのあとあの男によつ

て殺されたパイロットの一人が乗つっていた一機

その名は

「ガンダムスローネ！？」

ヨハン・トリニティが搭乗していた機体『ガンダムスローネアイン』
であった

「マスター！あそこにはスバルさんたちがいます！」

「…行くよ、フェイントちゃん！」

「うん！」

「…待て！あれば俺たちの世界の機体だ。俺とエクシアでやる」

「でも…」

「心配するな…」

そして刹那はスローネに接近する
スローネもこちちらに気がついたのか、こちちら体を向けてビームラ
イフルを放つ

「エクシア！GNシールド、展開！」

顔はフルフ

目を見開いていた

刹那たちが彼らの

行為を紛争帮助対象として武力介入をして、そのあとあの男によつ

て殺されたパイロットの一人が乗つっていた一機

その名は

「ガンダムスローネ！？」

ヨハン・トリニティが搭乗していた機体『ガンダムスローネアイン』
であった

「マスター！あそこにはスバルさんたちがいます！」

「…行くよ、フェイントちゃん！」

「うん！」

「…待て！あれば俺たちの世界の機体だ。俺とエクシアでやる」

「でも…」

「心配するな…」

そして刹那はスローネに接近する
スローネもこちちらに気がついたのか、こちちら体を向けてビームラ
イフルを放つ

「エクシア！GNシールド、展開！」

「了解！GNシールド、セットアップ！」

そして刹那の左手に青い盾が装備される
ビームライフルをかわしながらスローネに接近して展開したGNソード改で切りかかる
が、スローネはそれを移動してかわして再びビームライフルと肩のGNメガランチャーを連射する
それを刹那は左右によけながら時には盾を使用しながら接近して、GNソード改で攻撃する
スローネもよけるのは無理だと判断したのかビームサーベルで応戦していく

（人に気配を感じない…ならば…）

刹那は強引に剣を押し込みスローネを下がらせる
スローネも負けじと向かってくるが、パワーで負けている

「そこ…」

そして刹那は盾を左手から外して、右脇腹の方からGNビームサーベルを引き抜き、サーベルを持っているスローネの手を切り裂く
切断面は機械がショートしたりしていた
このスローネは人などは乗つていなくて無人のロボットだった
その時点で刹那は容赦はいらないと思い、再び切りかかる
スローネは一旦距離を取りメガランチャーで攻撃をする
狙いを定めさせないためにいろいろな動きをして相手を翻弄する
そして刹那はビームサーベルで切りかかるが、スローネはそれをよけるが刹那はそのビームサーベルを相手に放る
ビームサーベルはスローネには当たらなかつたが、態勢を崩して隙

が生まれた

そこを見逃さないで刹那はGNソード改で突撃する

「これが、俺たちの……！」

GNソード改で一閃

「ガンダムだ……！」

スロー・ネはスパークを起こして、小規模な爆発が起きる
そしてスロー・ネはメインカメラは光を失い動かなくなつた

episode 8 (後書き)

感想文を送ってください！

アンケートもよろしくお願いします！

アンケート結果発表とキャラ設定

今回はアンケート発表とキャラ設定です！
では、どうぞ！

主人公

名前：刹那・F・セイエイ
容姿：セカンドシーズン
デバイス：エクシア
管制人格：女（CVはお任せ）
バリアジャケット：ガンダムエクシアリペア？（以降は省略してガンダムエクシア）
待機状態：青い宝石

次はアンケート発表を兼ねたキャラ設定

名前：フェルト・グレイス
容姿：セカンドシーズン
デバイス：アルテミス
管制人格：男（CVはお任せ）
バリアジャケット：基本は緑（デザインは読者におまかせ）
武装は主にデュナメスとケルディムのものを採用します
待機状態：緑の宝石が付いた指輪
という感じでどうでしょうか？

このこんな意見をありがとうございます！

アンケート結果発表とキャラ設定（後書き）

お前をくれた白銀さん、ありがとうございました！
他の方々もどうもありがとうございました！

episode9(前書き)

3万PV突破!

ユニークも7千突破!(*^-^*)

V

episode 9

スローネを捕獲して刹那たちは六課の隊舎に帰還した
今は隊長室にいる
そしてはやてが口を開く

「単刀直入に聞くで?これを刹那君とフェルトちゃんは知つて
いるんか?」

映像に映し出されるのは黒い装甲に赤い粒子を放出している機体『
ガンダムスローネアイン』
あの後刹那はスローネを『デバイスルームに運びシャーリーに頼んで
スローネの情報を六課だけの機密情報にしてもらつた
地上本部に送れば間違いなく戦力としてプラスになるだろ?
それでは間違いなく争いの火種になりかねない

「この機体は私たちの世界で言つ『MS』といつもので、この世界
で言う質量兵器です」

「そしてこの機体の他にもう一機、接近戦とサポートを中心とした機
体があります」

フェルトとエクシアが説明をする

「ならこの機体のせいでロングアーチからの通信ができなくなつた
のかな?」

「スローネやエクシアから放出されている粒子には通信などを遮断
する性質がある。おそらくそれが原因だらう」

「でも刹那さんの時は何も起きたのです」

「リインの血とおつでスローネとエクシアのあの粒子は同じであるならば同じような現象が起きているはずだ
だが、エクシアは起きずスローネはその現象が起きた

「でも、それが本当だったら指揮系統がズタズタになるやないか?
たしかにまたスローネなどが現れてしまつた場合、通信などができ
ずに現場が混乱してしまつ

「エクシア、お前ならなんとかなるんじゃないのか?」

刹那がエクシアにどうかならないか聞く

「はい。ここは魔法は科学も混じつているようなので、私の中にあ
るデータを使えば可能だと思われます」

「ほんまかー?」

「後で私をロングアーチの方々に所へ持つて行つてもらえますか?」
「はいですぅー!」

「これで心配はなくなつたね?はやてちゃん

「うふ。それでフルトちゃんのデバイスに関してなんやけど……」

そう言つてはやてが懐から緑色の宝石が付いた指輪を取り出す

「それは？」

フェルトが聞く

「こやなあ？ 聖王教会の方で見つかったらしくんやけどな…」

すると、縁の宝石が光り出しつゝはやくから離れてフェルトのもとに移動する

そしてフェルトの目の前に浮いてくる

「フェルトちゃん、それはデバイスや」

「私のデバイスですか？」

「別にシャーリーが作ったわけやないんよ？ 聖王教会の方にあったものいしこがらな」

「どうして聖王教会の方にあつたんですか？」

「それは私にもわからへんよ」

はやてにもわからなこらし

そしてフェルトは手を差し出す

指輪はゆきくつとフェルトの手に乗り、そして喋り始める

「あなたがマイスター・フェルトですね？」

声は男の声だった

どうやらインテリジョン・デバイスのようだった

「そうだけど……」

「私は『アルテミス』と申します。そこにいる刹那様とあなたを守るために生み出された者です」

「……誰がお前を生み出した？」

「……それはあなたがよくわかつてこるはず」

アルテミスにそう言われて刹那は考えを巡らす
が、いつたい誰なのかがわからない

「……わからないな」

「いざれ現れるでしょう。あなたたちの力になるために……」

と、意味深なことを囁くアルテミス

だが、刹那は自分たちの仲間の中にいる者だと判断した

「それじゃあ、フルトちゃん明日そのデバイスで訓練してみよっ
か？」

「……はい。よろしくお願ひします

「俺も付き合おう」

「ありがとう刹那」

「でも一体誰がこのデバイスを作ったんやろうな？」

そしてこの場はお開きとなり刹那ははやてにエクシアを渡してフルと共に隊長室を後にする
一つの疑問を残して

そして翌日、刹那たちは訓練場にいた
なのはたちはいつも通りFWたちの訓練をして、それを終えて今は
刹那たちの訓練を見学している

そして一方で刹那とフェルトはフェルトのデバイスの訓練をしていた
シャーリーが新デバイスを作れなかつたことに激しく涙していたが、
その一方ではアルテミスの解析を強く迫つたがアルテミスの方から
断られてしまい断念した

「フェルト」

「うん…アルテミス、セットアップ！」

そしてフェルトが緑の光に包まる

そこに緑色のバリアジャケットを着て、両手にはケルティムの銃が

握られていた

「私はデュナメスとケルティムを参考にして作られました」

「デュナメスの…」

フェルトはそう言つて何かを考える

「よし、シャーリー、ガジェットを出してくれるか？」

刹那がシャーリーにそう言つ

「わかりました。何機にしますか？」

「十機で頼む。… Hクシア、セットアップ」

そして刹那もバリアジャケットを展開する

「いきなり十機！？」

スバルが驚く

四人でも十機はまだ難しいのに刹那はそれを要求してきた
フェルトはそんなことを考えていなかつた

ただ、刹那に近づきたくて刹那を守りたいという気持ちからであった

「フェルト、今から俺とガジェットを殲滅するぞ。フェルトは遠距
離で俺のサポートだ」

「うん」

「じゃあ、訓練開始！」

そして訓練が開始した

刹那がGNソード改を展開して敵に接近する

エリオは刹那の動きを真剣に見ていた

フェルトはデュナメスのGNスナイパーライフルを手にして空中に飛翔する

その動きをティアナは見ていた

フェルトは間違いなくティアナと同じポジションになるだろう

刹那がGNソード改でガジェットの一機を切り裂く

フェルトは刹那をサポートしつつこちらに近づいてくるガジェット

を距離を縮めないために狙撃する

精度はあまり高い方ではないが初めてにしてはいいほうであった

フェルトは次の目標に狙いを定めて狙い撃つ

「すごい。刹那さんは前からすこかつたんですけど、フェルトさんも未経験とは思えません」

キヤロが驚いていた

「やっぱり刹那さんは僕の目標です！いつか僕も…」

エリオは刹那を改めて目標と定めた

ティアナとスバルは二人の連携に見とれていた

ティアナはフェルトを見て複雑な表情を浮かべていた

(フェルトさんはあれ戦闘経験がない…やっぱり凡人は私だけか。でも関係ない！私はランスターの弾丸が誰にも負けていないことを証明するだけなんだから！)

だが、ティアナはこの焦った思いが誰かを危険に晒すことになることを予想もしていなかつた

なのはとシャーリーも二人の連携は結構いいものだと感じていた
フェルトは戦闘経験はないが、組織に入る際に多少は訓練をするためすぐに慣れた

そしてフェルトはスナイパーライフルからケルディムのGNビームピストルに変換して接近してきた敵を撃ち落とす

だが、AMFで敵を落とせないときもあつたが、それが足止めとなり刹那が後ろからGNソード改で破壊する

フェルトはそんな刹那に微笑んですぐに表情をえて敵を撃ち落としてそれであつという間に訓練は終了した

「速い…」

「うん。刹那君は相変わらずだけどフェルトちゃんも筋がいいよ」

「ティア、二人の連携どうだつた?」

「主に刹那さんが敵を倒していくってそしてフェルトさんが刹那さんのサポートね。私たちと結構似ているわね。しかも私たちより連携がいい」

「うん。…負けられないね」

「そうね…」

そして刹那たちがこちらにやってくる

二人はジャケットを解除してなのはたちの前に立つ
フェルトはやはり初めてだからか息が荒かつた
刹那は普通にしていた

「二人ともお疲れ様。フュルトちゃん、感覚はどうだった?」

フュルトは深呼吸をして、落ち着いた口調で話す

「アルテミスが補助をしてくれるので狙撃と射撃もなんとか」

でも得られるものは得たようだ

「それじゃあ、今日はここまで…シャワーを浴びて食堂に行こうか

…」

「…」「はこ…」「…」「…」

そして今日の訓練が終了した

episode9（後書き）

話の展開が早いと思つ

感想などよろしくお願ひします！

4万PV突破とユニーク9千突破記念 another episode (前書き)

今回は刹那とフェルト

4万PV突破とユニーク9千突破記念 another episode

刹那とフェルトが異世界に来てから暫く経ち、現在クリスマス
今日機動六課は早めに業務を済ませて、クリスマスを楽しむようだ
エリオとキヤロはフェイトに注意を受けて一人で、スバルとティア
ナのお馴染みコンビは出かけている
なのはとフェイトも一人で出かけているが、はやてはこんな日でも
部隊長の業務に苦しんでいた

刹那とフェルトも初めての聖夜の夜を一人で過ごしていた
現在二人は外にで歩いていた。刹那の服装はお馴染みでフェルトは
読者の想像にお任せ

ちなみに一機のデバイスには退席させてもらつていてるよ（作者）

「どこに行こつか？」

フェルトが刹那に聞く

「特に無いな。フェルトはどうだ？」

「うーん…私も特にないかな（刹那といるだけでいいし）」

二人は特に行くところもなくグラナガンの街を歩いていた
二人は気がつかないだろうが、普通にしていれば二人は美男美女な
のだ
隣合せで歩いていれば美男美女カップルなのだ

「（なんだ？周りの視線が異様に…）」

刹那は視線を感じ取り、警戒をする

この視線は一人を見て見とれている男女の視線だとも気づかずにつぶやく。

「?.どうかした刹那?汗がひどいよ?」

「つ……いやなんでもない」

「?」

周りの視線を感じていないうェルトは刹那が視線だけで冷や汗を流していることに気がつかない

そのあとも一人は特に会話をせずにただ歩いていく

それもそうだろう。一人は向こうでは毎日が戦いだったのだ

安寧の日々は全てと言つていいほどトレミーの中で過ごしていたのだ

しかもお祝いなどトレミーで行なつた一回しかない

だが、あれはトレミーのなかであつてこのよつた世界規模なイベントではなかつた

「…平和だな」

「えつ?」

「元の世界だつたら俺たちは戦いが日常だつた。だが、今俺たちはこうして平和な日常を過ごしている」

「うん」

「だが、同時に俺たちは、俺はこの平和の中で生きていいのか?」

「…」

刹那の問いに答えられないフェルト

「戦いのない世界、それは俺たち『ソレスタークビーイング』が掲げた『紛争根絶』の先にある未来だ。だが、それを達成できていないのに俺たちはこうして戦いから離れて過ぐ」している

刹那は喋るのをやめない

「本当にいいのか？このまま戦いから離れてしまつたら俺は何のために生きていけばいいのか、俺から戦いをとつてしまつたら何が残るんだ？」

刹那は恐れていた

自分から戦いをとつてしまつたら、自分はどうやって生きていけばいい？

なんのために生きていけばいい？

そんな思いが刹那の心を満たしていく

フェルトはそんな刹那の手を取る

「フェルト？」

フェルトは涙を流していた

「そんなこと言わないで。自分を戦うための道具みたいな言い方をしないで…お願い…！」

フェルトは涙を流しながら言葉を紡ぐ

悲しかった。今まで刹那の人生は戦いでいっぱいだった
人並みの幸せを一人の男に壊されてしまい、そこから少年兵となり
ガンダムマイスターとなる人生

一日一日が戦いで埋めつくされ、いつ死んでもおかしくはない戦場

「私は…刹那にも幸せになつて欲しい。戦いがあつてもそれ以外の時は幸せな時間を送つて欲しい。できれば戦いもやめて欲しいけど…刹那はそれを拒むんだろうけど、私や『マリナ』さんもきっとそれが望むと思うよ?」

「…」

マリナの名を出されて言葉が出なくなつてしまつ刹那

「だから今だけでも…ねつ?」

「……」

沈黙の刹那

そして沈黙を破るのは、沈黙であつた刹那だった

「いいのか?」

「うん。いいんだよ。誰にでも幸せは平等だから、刹那にも幸せはあるよ。きっと」

微笑みながら刹那に手を差しのべるフルト
その手をじっと見る刹那

「（二ール、マリナ、俺は変わる。イノベイターとなつても俺自身の変革は続く。だから俺は今この平和を受け入れる。そして変わる。俺もフェルトも変わる…）

そして刹那はフェルトの手を取る

「すまなかつたフェルト」

「ううん。私は刹那に幸せになつて欲しいだけだよ」

「…ありがとうフェルト」

笑顔で刹那はフェルトに礼を言つ

「～？？！／＼／＼

その笑顔はイノベイターとの最終決戦前にリングダから貰つた花に写つていたあの時の表情だった

誰にも心を開かなかつたあの頃とは違つ。今はこうして仲間を思い、自分を変えようとする彼の笑顔を見ると自分でもわかるくらいに頬が熱くなつていいくのが感じられる

「？フェルト、顔が赤いぞ。熱もあるのか？」

そう言つて刹那はフェルトの額に手を当てる

「～？？！／＼／＼／＼／＼

さらに赤くなるフェルト

先程の雰囲気とは違うフェルト

今は完全に一人の女性となつていた

「あゆあゆあゆあゆあゆあゆ～！」

「おい？ フェルト！？」

そしてフェルトが元に戻るのに一時間ぐらいかかったそうな
その後、一人は再び歩き出すが、フェルトの顔は終始赤くなつてい
た。それもそのはず

先程手を取り、そのままずっと手を握りながら歩いていたのだから
しかも先程の沈黙とは違い、今度の沈黙はどこか優しく心地よい沈
黙であった

この後、二人は隊舎に戻るまで手を繋ぎっぱなしではやてたちに弄
られたのはお約束
フェルトは顔を真っ赤にしていたが、刹那は至つて普通であった

4万PV突破とユニーク9千突破記念 another episode (後書き)

なぜなんだ！？

どうしてもシリアスな雰囲気になってしまつー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6645y/>

リリカルなのは O O StrikerS

2011年12月25日19時51分発行